

<川越市>

市議の資格ナシ！！

「デタラメ」と「ごまかし」だらけの高橋剛市議の醜態

2月16日（土）、本紙は高橋剛（社民党）川越市議会議員に公開質問書を送った。高橋氏が編集・発行する社民党川越支部の機関紙「社会新報」（2019年冬季号外）での記事について、高橋市議の真意を問うためだ。

社会新報のセクハラ関連記事

公開質問書

根拠もなく個人バッシングを広報する偏向市議！

高橋市議は、名前こそ出さないものの元市議の新井喜一氏を批判している。しかも、記事そのものが極めて恣意的で、あたかも「**第三者委員会の調査結果でハラスメントが認定されたから議員を辞めた**」かの印象を与える文章だ。実際には、新井市議は調査結果を待たずして、議会を混乱させないためという政治的な理念から辞職したのである。

それが高橋市議の記述では、調査されてハラスメントが認定されたから辞めたという誤解を誘導するかの文章になっている。自らの支持基盤を固めるためなら、人の転落を利用するのは「**政治屋**」の常だが、本件の場合、新井氏のハラスメントは法的に事実認定されたものではない。本紙既報の通り、市長の身内（**第三者委員会**）が新井氏に有利な不都合な目撃証言を削除し、公開さえしない証拠によって一方的にハラスメントを「**推認**」「**認定**」しただけである。

高橋剛市議は、今後、新井氏の無実が法廷で立証されたら、どのように責任を取るつもりなのだろうか。そのうえ高橋市議の文章は、法的資格を持つ人間に対する懲戒処分を意味する「懲戒請求」という言葉を誤用しており、社会常識の欠落さえ明らかだ。

しかし、さらに重大なことには、新井氏がハラスメント被害を訴えた女性に「二次被害」を与えているかの記述をしているのだ。新井氏がすでに私人であることを考えれば、これは高橋市議という公人が一方的に市民を断罪していることになる。

匿名ネット市民らが、マスコミの虚報だけを情報源に、特定の人間をバッシングしては悦に入るという現象は、もはや現代社会の病理といっても良いが、仮にも市議が自らの政党機関紙で、特定の人物を指して、まるで疑う余地もなく加害者であると決めつけるとは言語道断だ。新井氏の名を出さなくても、川越地方版の政党新聞の記事であれば、それが新井喜一氏であることは誰にでもわかることだ。

根拠もなく「新井氏が二次被害を与えている」と主張することは名誉毀損だ。

機関紙といえは大層に聞こえるが、実態としては高橋市議の後援者たちに向けた形式的な広報紙に過ぎず、そこに記載されている記事はそのまま高橋市議個人の発言と同じことだ。したがって、回答を示すのに調査も検討も要らないはずで、テレビニュースに登場する政治家のように、質問されれば即答できる内容である。

しかし高橋市議からの回答が得られないため、本紙は21日、高橋市議に取材するべく議会運営委員会（以下「議運」）を訪れた。ここで話し合いが行なわれる「その他」という項目では、傍聴人は退出させられるため、本紙は終了後に他の市議らに様子を聞いた。

高橋市議は本件新聞の問題を問われたが「政党新聞のことなのだから議運で取り扱うものではない」と、議運での審議を拒否したという。

議運が各会派で協議しての休憩後、あらためて「**二次被害とはどういう意味か**」と高橋市議に質すも、やはり明確な回答はなかった。

しかし、高橋市議は「**誤解を与える表現は今後、気をつける**」旨の釈明をしたという。

無責任かつ選民主義者の高橋市議に市民代表の資質はゼロだ！

〔本紙は、議運終了後の高橋市議を直撃取材した。以下が、そのやり取りである。〕

本紙 「高橋先生、お送りした質問書に回答頂けませんか？」

高橋市議 「あの質問は間違っている。」

本紙 「どこが間違っているんですか？」

高橋市議 「質問が間違っている。」

本紙 「それでは書面で間違っているという個所を教えてください。面倒なら、今、ここで口頭でいいので教えてください。」

高橋市議 「質問が間違っている。読めば判る。」

本紙 「回答拒否ということですか？」

高橋市議 「質問が間違っている。」

本紙 「回答拒否ですね。」

高橋市議 「質問が間違っている。」

呆れるほかないが、高橋市議は本紙のいかなる質問に対しても「質問が間違っている」としか答えず、会話が成立しない。もちろん、高橋市議が会話を成立させないために、あえてこのような態度を取ったのである。高橋市議は、これが政治家としての答弁テクニックだと勘違いしているのだろうが、単なるデタラメ、ごまかしの姑息な手段である。

または、他の人達が言うように「**あいつはバカだから答えられない**」のだろうか？

しかし、ここに見えるものは高橋剛という人間の、無責任さと選民主義だ。

高橋市議は自ら「**政党新聞**」での発言であったことを認めているのだから、その主張に対して市民から問われれば、市議としての説明責任がある。ところが高橋市議は、自分に都合の悪いことは無意味な言葉を繰り返すことで会話を無効化させれば良いとする、無責任極まる態度で逃げる。自分自身が発信した言葉に責任を取れないのだから、市議としての資格など皆無であることはこのやりとりでも明白だ。

もしくは高橋市議の支持者諸氏は「**それはあんたがた行政調査新聞が相手だから、高橋先生もまともに受け合わないだけだ**」と言うかもしれない。しかし、そちらの解釈の方がより重大な過ちだ。なぜなら、そのような考え方は、人間を社会的地位や利用価値で選別する選民主義思想だからである。

では聞きたいが、これが仮に NHK や朝日新聞記者が相手でも、高橋市議は「質問が間違っている」とバカ同然の繰り返し答弁で応じるとでも言うのだろうか？ もしも、メディアに対しても本紙と同じように対応すれば、全国的に問題視されることは明らかなのだから、高橋市議も態度を変えるはずだ（同じだというなら、逆に褒めて差し上げよう）。

つまり高橋市議は、政党新聞上の公の発言の根拠を市民に問われても説明責任は果たさず、社会的地位や組織への属性で人の優劣を探りながら、市民を小馬鹿にした対応に終始する差別主義者ということになる。

一般論として誰もが知っている格言を高橋剛という人間は知らないようだ。それは「大事を成しえる者は、小事も成す」というアリストテレスの至言である。本紙のごとき小市民の簡単な問いからも逃げる自称政治家が、市民社会に奉仕するような大事が成せるはずもない。

ところで高橋市議、アリストテレスって何時代のどんな人物だか、即答できますか？ 笑。